

チョム・カンリ峰(7,048m)登山

中国・チベット自治区

『カータン峰からチョム・カンリ峰まで』

1999年日本ヒマラヤ協会

佐藤英樹

どうしてHAT-Jに入会したかを話してみよう。1981年10月に初めてネパールを訪れた。82年にルクラの近くの未踏峰であるカータン峰(6,782m)に、道央地区勤労者山岳連盟で、登山計画が持ち上がり、その偵察に訪れたのだ。喧騒のカトマンズ空港に着き、ネパールで過ごすうちにカルチャーショックも興味に変わり、新鮮の感じられた。今ではすんなり？と、カトマンズからルクラまでフライトできるが、当時は便数も少なく、また有視界飛行のため、雲が出ているとフライトができず、飛んでも引き返したりと、なかなか大変だった。天候が回復し飛行機はあるが、パイロットが帰ってしまったこともあった。ポーターも少しらしいの雪なら素足だったし、ひび割れた足をみるとかわいそうだった。82年には先発隊隊長として再訪し、当時道路建設中のカトマンズ～シリ間はトラック。シリ～ルクラ～ガト～BC入りした。飛行機が当てにならないからだ。ポーターの雇用も100人規模だった。結果は初登頂で、しかも9名の大量登頂であった。もちろん小生も。しかし今、環境問題を考えると、キャラバン中、またBC用の石油コンロは持っていくのだが、石油の質が悪くまた性能が悪いので主燃料は薪だった。薪を取るのBC付近では高所のため無く、ウットポーターを使い下方から運び上げ、また木も少なく大変だった。また今言



チョム・カンリ峰 (7048m)

われているテイクイン・テイクアウトの思想はあるべくもなく、ゴミの処理も燃やすだけでずさんだった。それが一般的で、この遠征隊でもそうだった。89年今度は旧ソ連邦、今のタジキスタンにあるコルジェネフスカヤ峰(7,105m)に、札幌登攀倶楽部の隊長として行き登頂。ここは国際キャンプだったので環境は良いのだが、やはりクレバスは非常によく使われた。91年には再度ネパール、アンナプルナI峰(8,091m)に、連盟隊として遠征したが登頂はできなかった。それどころか雪崩に会い、奇跡的に助かり帰国した。この時は主燃料は石油であり、石油コンロも改善されており薪ではなかったがポーター達は相変わらず薪だった。森林の減少で、洪水・土砂崩れが起き深刻な問題になっているがやっと最近ポーターの燃料にも目が行くようになってきた。各団体の活動のあらわれだろう。当時はテイクイン・テイクアウトの思想もまだまだ行き渡ってはいなかった。この年1991年にHAT-Jが設立され、田部井さん

が代表になった。小生はいつ入会したかは定かでないが、No.624 なのでおそらくこの年か翌年の入会だろう。このように度重なる遠征で、木を伐採し、ゴミを残し、美しい山々を汚してきたので自責の念にかられ、ヒマラヤの環境保護、保全に少しでも役立てれば良いとカンハのつもりで入会したのだ。それで今でも会員として残っている。その意味では、HAT-J が今ヒマラヤよりも日本の清掃登山に目が向いているのが残念だ。96 年には中国ウイグル自治区のムスタグ・アタ峰(7,546m)に、日本ヒマラヤ協会隊で 6,950m に悪天のため 3 泊することになったが登頂。この時は日本ヒマラヤ協会隊に始めて参加したのだが、非常にテイクイン・テイクアウト、そして環境保護・保全に厳しい団体なので今までとは違う内容だった。しかし、多くの外国隊も入山していたが、他の外国隊をみるとテイクイン・テイクアウト、環境保護・保全活動にはほど遠く、もっと世界的な啓蒙活動が必要だし、日本の方が進んでいるように思えた。BC で一生懸命他の外国隊のテント跡を清掃したものだ。99 年夏、今回、中国チベット自治区にあるチョム・カンリ峰(7,048m)に、また日本ヒマラヤ協会隊の副隊長で参加することになった。96 年秋に中国・韓国の合同隊で初登頂。97 年春には中央大学隊が第 2 登を果たした山だ。今回は第 3 登目の挑戦で、夏季のシーズンでは初めてだ。地元チベットの人たちはチョム・カンガと呼ばれ、「女神の峰」または「知恵の目」として崇めている山だ。ニエンチ



BCでトイレ作り

エン・タンラ山群第 2 の高峰であり、また独立峰であるためモンスーンの影響をまともに受け、晴れた日は登山期間中 2 日しかなかった。8 月 16 日、雪崩の危険がいつも付きまとう中での、8 人中小生を含め 3 人の登頂。また登頂後の大きな雪崩も運よく回避できたのは幸いだった。今回は困難なルートで、多くの FIX ロープを必要としたが、下部のみ登頂後、後日回収しに行った。燃えるものはこまめに焼却、また不燃性もウサまで下ろした。HAJ では必ず環境担当の隊員がいて、目を光らせている。



キャラバン隊

『登頂記』

(HAJの機関紙から抜粋)

明るくなってから行動しようと、起床は5時半になった。夜半からの吹雪がまだ続いていて、視界が悪く、C2の出発は天候待ちになった。8時の気温はマイナス5度、そんなに寒くはないが稜線の風は強そうだ。3人の体調は、始めてC2(高度6600m)に泊まったにもかかわらず、ほとんど高度障害は出ていない。ルートワークで完全に順化したのだろう。川崎さんの咳は相変わらずだが、それでも武部さんと一緒にいつも煙草を吸っている。よく吸えるもんだと感心する。テントの外に出て、出発ためらいながら天候待ちをしている間、風を警戒して薄手の羽毛服をセーター代わりに着る。大きな空間に僅かに一瞬の光の瞬間。「行ける。天気は良くなる、行こう。」8時30分過ぎC2を出発する。トレースは消えているが、昨日FIXした3Pで稜線に上がる。稜線は広い。風はさほど強くはないが、稜線もやはり視界は悪い。FIXをもう1P延ばすが、時間がかかるのでその後コンテで、ただただ高みを目指す。稜線に上がって少し傾斜は緩み、フッセルも始めは大したことはなかったが、だんだんと豚くらいになってくる。小生は気温が少し上がり暑いので途中で羽毛服を脱いでしまった。少し暑さにやられたようだ。無線交信で、武部さんがC1にアツタクしていることを告げると、「明日がある。決して無理をしないように。」との隊長の返答。しかし、二人の意志確認をすると、「行きましょう。」との返事。皆、明日だと体力的に



も、また天候もどうなるか分からないから、今日のうちにけりをつけたいからだ。もちろん行けない天気ではない。川崎さんが「ぼくがラッセルをします」とザックをデポし空身で登っていく。彼の頑張りには頭が下がる。視界は悪いが、左右の雪と空の境がだんだんと近づいてくるのが分かる。傾斜も緩くなり、やがて長く、広い平らな一角に出た。先行した武部さん・川崎さんが何かを探しているような感じで歩き回り、それから手を握り合っている。それを見て、「ああ、ここが頂上台地なんだ。」と思うがそれが分かっているもなかなか二人に近づかない。苦しい。一步一步が苦しい。バテバテだ。「頂上です。間違いありません。韓国隊の登頂の写真と同じです。」小生を待っていた二人が言う。見渡すと、外に高いところはあるべくもなく、北側の境はスツバリ切れ落ちているのが分かる。思ったより早く頂上に着いた。晴れていればニンテン・カンサ、ニエンチエノ・タンラ山群の展望は素晴らしかっただろうに残念だ。お互いの労をねぎらい、感謝の握手をする。自然と涙腺が緩む。過去何度か、初登頂を含め何度か頂上に立ち、それなりの苦労があったが今まで涙が出てきたことはない。年(51才)を取って涙脆くなったせいでもあるまい。

他の二人も涙ぐんでいるようだ。始めは楽勝かと思われた、チョム・カンリも、天候が安定せず降雪に悩まされ意外とルートも延びず、時間切れの可能性も出てきた中で、の登頂だった。non sherpa で充実してたのもあつたろう。8月11日にBCからFIXを掘り起こしながらC1入り、それから上がりつばなしで、疲れがピークに達していたので、感極まったかもしれない。とにもかくにも嬉しい。C1・BCに登頂の交信をし、祝福を受け、急いで東京農大からHAJに依頼された積雪のサンプル採取をする。武部さんはというと、やはり頂上でも煙草をうまそうに吸っ

ている。恐れ入る。これだけ高所で吸うと煙草会社からの表彰ものだろう。C2へは14時20分到着。B隊がC2入りしないというので、C2に泊まり明日BCに下山することになった。

登姿倶楽部の会員としても又北海道の岳人としても今回は頑張ることができた。2001年にまたトライしたい山ができたので、お金を貯め精進努力してまた頑張ろうと思っている。

シルクロードの旅 ————— 福沢益子

ひよんなことから餃子を本場で食べようという話が持ち上がり、シルクロードの旅に出ることになりました。9月23日、昼、名古屋空港で、しばらくソバも食べられないからとザルソバを食べ、15時45分発西安行に乗り込みました。途中、上海空港で給油して、20時20分西安着、ホテル建国飯店に到着き今更ながらお隣の国は近いと思いました。

24日、西安市内観光が始まり、兵馬俑の圧巻に浸りながら昼は有名店で餃子を食べる。今回の旅の目的でもありタレ、味と吟味する。ガラス越しに製造室も見学できる。

『兵馬俑兵士を語る落葉道』

午後、砂漠の上を飛行機は飛び続けると2時間半、ホッカリと緑地帯が現れ



敦煌に着く。女性ガイド李さんに「今日は鳴砂山に名月が上がります。一年に一回のチャンスです。ぜひ！」とのことで鳴砂山に向う。やがて名月が出てきて思わず「月の砂漠をは一る一ぱると」とハミングする。

『月餅割り敦煌の月を祝いたり』

『満月や帰るラクダのシルエット』

『十五夜を見んとラクダにゆられゆく』

25 日午前、莫高窟を見学。唐の時代に女官達が頬に花びらを飾る化粧が流行したとか、壁画におもしろい顔が並んでいました。時代は巡るのですね。

『天高く飛天は衣なびかせり』

『綿花摘む家族を待つかロハ一頭』

午後、夜汽車の出る柳園駅へ車は走る。夕方、火車(汽車)でトルファンへ向う。行李車(貨物車)を連れて……。

『ひた走る夜汽車を砂漠の月が追う』

客車は二段ベットで一室 4 人です。同室の夫婦に片言の英語で自己紹介をしたら、「私はアメリカ人、日本に 7 年暮らしました。」との返事に大笑いしました。26 日早朝トルファンに着く、ウイグル文字がくっきりと浮かび寒い。男性カイト張さんと、千仏洞、王宮墓、ミラ、艾河古城、火焰山(時間がなく登れなかった)を見学。カースの水を飲みながら、砂漠の民の遠大なプランを思いやり干葡萄を買う。

27 日ハスでゴビ砂漠を走り、天山山脈

を越えてウルムチへ向う。ホゴタ峰が見事に白く浮かびあがる。博物館でミラを何体も見る。ゴビ砂漠の乾燥がミラの保存に適しているのかも……。

28 日成都に戻り、市内見学、29 日峨嵋山へハスで登る。(時間がなく徒歩はムリと)30 日、成都へ戻り夕方から道内の方で今 JICA で農業指導をしている方の部屋で、ホームパーティを開いて下さり餃子作りをして楽しみました。

10 月 1 日、上海に戻り、丁度国慶節とぶつかり機内でお祝いの時計を頂く。お祝いのため一週間休みの職場が多とか、空港も旅行者が多く、その人の多さに圧倒され市内見学もそこそこにホテルに引揚げました。

2 日、名古屋に帰り千歳は気温 11 度、雨降りでした。何やら小走りの旅でしたが、漢字のお国のせいか読み方は違っても意味が通じ、言葉を少し勉強して、もう一度熱烈歓迎にこたえようと思う此の頃です。

1999 年北海道支部活動記録

1 月 23 日(土)新年会

2 月 13、14 日(土、日)大雪山自然フォーラム 宮崎、平岡、増子

4 月 25 日(土)総会、出席 12 名

4 月 26 日(日)塩谷丸山親睦登山 宮崎、杉林、五十嵐、枝並(正、夕)、真嶋、坪原

6 月 6 日(日)神威岳(定山溪)清掃登山 宮崎、花島、杉林、五十嵐、伊藤(十)、東、
他 9 名

6 月 27、28 日(土、日)芽室岳清掃登山 真嶋、坪原、尾崎、長屋、杉林、五十嵐、福沢、
高木、伊藤花島

7 月 10、11 日(土、日)万計山荘管理当番 宮崎、杉林、五十嵐、小野、和田、福沢

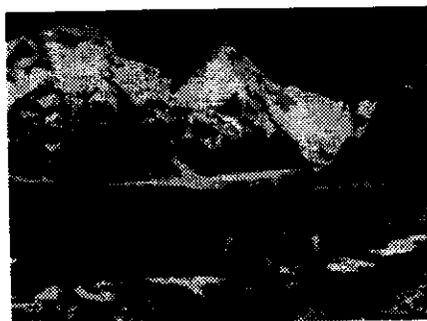
10 月 9、10 日(土、日)無意根山清掃登山 宮崎、大内、杉林、五十嵐、真嶋、坪原、長屋、
枝並(正)、和田、東、下村、河井、浅原、高木、道外会員 4 名、

天山山脈最高峰・ポベータ(7,439m)での

テイクイン・テイクアウト

真嶋花子

私がポベータを知ったのは、'93年にハンテングリ峰(7,010m)に登った時に初めてその名を知った。ズヴォズドチカ氷河にどっしりと構えた山が天山山脈の最高峰ポベータだった。その雄姿は研ぎ澄まされたような、ピラミッド型のハンテングリとは対照的である。その時はまさか自分に登るチャンスがあるとは思ってもいなかった。なぜなら、ポベータは雪が深く、雪崩も多い、ポーター、シェルパーはいない、更にルートは難しい。そんな難しい山に年齢50歳から65歳の女性隊で挑戦しようなんて本気なのだろうかと疑った。'93年は大雪のため屈強なロシアのクライマーでも誰も登れなかった。しかし難しい山には、1年でも若い方が良いという考え方もある。こうして7月20日、メンバー8名は成田を発った。カザフスタンに着くと更に車で5~6時間行くとカルカラキャンプに入る。標高2,000mのカルカラはエーデルワイス、フウロウやアザミなどの花々が咲きみだれる真中にテントや食堂などの施設が建てられている。近く



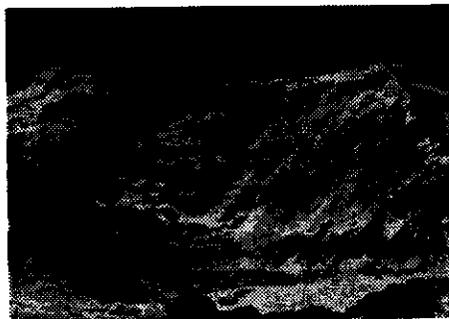
ハンテングリ

の山から流れ出る沢を利用してサウナやシャワールームまである。'93年に訪れた時より環境は整備され、テント周辺にもゴミは見られず、特にトイレは清潔に保たれていた。このキャンプのオーナーは田部井さんと親しく、環境問題については田部井さんの意見が大いに反映されている。

ポベータやハンテングリの登山者の多くは、ここからヘリコプターで標高4,000mのBCIに入る。BCIには世界中から登山隊、トレッキング隊、そして2時間だけのヘリツアー客が来る。4,000mの氷河上には大型テントの食堂、サウナ、いくつもの客用テントそして4つのトイレが設置されていた。トイレに底は無く、

そのまま氷河に落ちていく。せめて使用済の紙は捨てないようにと私達は袋を取りつけ回収した。基本的にBCでの食事は提供される献立を食堂で摂るが、やはり日本食も食べたいと隊員8人分の食料を持ち込んだ。生野菜もカザフスタンのバザーで買い込んだ。自分達の出した生塵は乾燥させその他の燃える塵と一緒に計量後燃やした。不燃物はヘリでカルカラまで降ろした。ちなみに、食堂で出た生塵は、ヘリでカルカラまで降ろし近隣の家畜の餌にしていると聞き安心した。

C1からの上部キャンプは登山者の数が少ないこともあるが、ゴミを見ることはなかった。もちろん私達も自分達のゴミは全部自分達で下ろし、ロシアのガイドたちもテント場にゴミを残すことはなかった。彼らの食料はハム、パンそしてチーズの塊とゴミがでるようなパック詰め物はほとんどなかった。(でも日本の高所用α米はとてもおいしいと好評だった) ソーメン状になった古いザイルが何本もルートに残置され、どのザイルが使用できるのか迷い、また自分達とのザイル絡んだりと危険だった。それは今はもう無用のゴミであった。この環境での収は大変な仕事であることは理解でき



BCからのポベータ主峰、右の西峰より頂上へ
るが…。

カルカラやBCキャンプへの訪問者にとって確かにサウナやシャワーは快適なテント生活を約束してくれる。しかし、川や氷河に流される汚物や汚水の処理はこれからの課題となる。このことについても登山終了後、カルカラキャンプを離れる前日に田部井さんとオーナーは熱心に話合いをしていた。

『渡邊玉枝さんプロフィール』

昭和13年 山梨県河口湖町生まれ

(61歳) 横浜市在住

主な山歴(登頂記録)

昭和52年 マッキンリー南壁アメリカダイレクトル

ートより登頂女性第1号

平成3年 チョーオユー(8201m)

6年 ダウラギリ主峰(8167m)

10年 ガツシャブルムⅡ峰(8035m)

11年 ポベータ(7439m)

日本スポーツ賞受賞(最優秀賞)

読売新聞社(山岳の部個人)

万計山荘管理に参加して

和田真紗子

平成 11 年 7 月 10、11(土、日)の両日にわたって万計山荘管理宿泊に HAT-J のメンバーの一員として参加した。

万計山荘はご存知のとおり、山岳を愛する人達が万計山荘友の会を結成してこの山荘を守り管理している山小屋です。

北海道支部第一回空沼岳清掃登山の折に田部井さんをはじめ会員の人達が、この山荘で記念写真を撮りトイレを使用し、豚汁を御馳走になりお世話になった山小屋です。

7 月 10 日早朝より、福沢さんが先発で小屋入りをしたのですが、物置きのカギが開かず募金箱が出せない等困った場面もあってのですが掃除や登山者のお世話をして夕方下山しました。午後 3 時頃私が行った時には A さんと息子さんがすでに管理に入っており、少し後に宮崎支部長そして B さん続いて五十嵐さん、杉林さんが食料品や小屋の備品など持参して小屋入りをした。五十嵐、杉林の両氏はさすが慣れたもので着くなり、小屋囲りや備品の点検、夜のランプの準備から宴会に至るまで、手際良く進めて感心させられるばかり

でした。特に杉林さんのトイレ掃除には脱帽です。

小樽から来たと言う、自然体験学校の一行(20 名程)が二階に宿泊していて、その子供達や先生にポンプの使い方や水の大切さ、環境や山でのマナーのことなどさりげなく教えている杉林さんは子供たちのアイドルになっていたようです。夜はジーンズ汗を囲みコップ片手に五十嵐さんの熱っぽい語り口に考えさせられたり感動したりでした。

トイレのことゴミ問題そして山小屋のあり方やマナーなど広域にわたり環境問題を含めた登山についての話に夜の更けるのも忘れる程でした。

翌朝、自然学校の一行は、この山荘で実体験の中から何か大切なものを学んだようで、前日より少し大人?になったような頼しきで元気に出発しました。

次の人が気持ち良くすぐ使用できるようにとランプの手入れや小屋の整理整頓をした後、空沼岳へ登る人、早目の下山に着く人、夕方迄山荘に残る人と各々に万計山荘の管理宿泊を終えました。来年も又、HAT-J 北海道支部の一員として参加できればと思います。

鹿と山の民俗 北海道札幌緑路高等学校 教諭 枡谷隆男

「音のはじめ 音楽の創まり」

平成11年3月末から4月上旬にかけて、北陸・東海・関東・東北を二輪車で旅した。四輪に乗らない主義の私は30歳で二輪免許を取り、オフロードバイクを駆って新鮮な空気、澄んだ水、可憐な草花、美しい鳥の声や獣の姿を求めて山に入る楽しみを持った。それは自然との会話だけではなく、私のライフワークである音楽の起源と自然との関係を探る旅でもある。苫小牧・仙台のフェリーのラウンジでは、ピアノの弾き語りが疲れた体を癒してくれた。この音楽の不思議な力のルーツはどこにあるのだろうか。

日程的に山道をのんびり走る余裕がなく、高速道路を飛ばして新潟県新潟市美術館に着いた。私は開催中の「音のはじめ 音楽の創まり～日本の音を聴く」に笛を十数点出展した。この展示は人間がいかにか音を獲得し、楽器を発明し、音楽を創造したかを探るものだ。私の所蔵する笛は全て自然素材で、竹・石・木・骨・葉・獣皮でできている。しかも、それは風、水、動物の声など、自然の音を再現するために生れた。

美術館で縄文時代の復元鹿笛と、秋田の阿仁マタギ故松橋金蔵氏製作のワラダを実演した。鹿笛は凸型の鹿角本体に鹿皮(膀胱、胎児の腹、耳など)を張り、鹿の擬声を出して鹿を誘き寄せて獲る狩猟用音具である。狩猟民族はこの笛を狩猟前の精霊を呼ぶ儀式や、狩りに成功した後の感謝の儀式にも使い、狩猟の合間の手慰みにも吹く。これは音楽の起源を解明するヒントになる。「自然模倣説」という音楽起源説は、自然の音の模倣

から音楽が生れたとする。藁をドーナツ型に巻いたフリスビーのようなワラダは、投げて鷹の羽音を真似る。天敵が来たと思って雪穴にもぐり込んだ兎を、手補りする威嚇道具である。

太鼓は胎内の母の鼓動の記憶を再現して、人間に力を与えたり、雷鳴の模倣で電神を招き雨乞いに使う。笛は風や様々な動物の声を作り出す。おなじみのリコーダーは、recordすなわち「小鳥が巣の中で囀る」という意味に関係し、鳥の声で鳥を誘き寄せたり、鳥獣に悟られぬように狩人が信号に使ったものだ。近世ヨーロッパは、作曲したメロディを鳥に教える調教笛としても使われていた。

食糧が豊かであるようにと、人々は神靈に祈りを捧げた。その祈りこそ音楽の原点である。鼓動や鳥獣の声、波、風、雷等の自然の音の模倣を音具に託した。獲物の骨や角は笛に、皮は太鼓に、狩の道具・弓は琴などの楽器に変化していったのである。



鹿笛(左から縄文復元、マタギ、アイヌ2点)

(撮影:竹内敏信氏)

「マタギは三代続けてはならぬ」

父万の祖父は、明治34年(1901年)、18歳で一族五人と富山から神楽村(現旭川市)に入植した。一昨年秋、不明だった本家を捜

し当てた。折谷家移住百年も記念し、初めての単行本『鹿の記憶』を富山の出版社から出す。打合せのため駅前に一泊した。

愛知の大学に入学した次女の家を覗きがてら、鹿の伝説の多い三河を回った。鳳来寺(鳳来町)に子に恵まれない兼高長者が願をかけると、薬師如来が白鹿になり女の子を授けた。足の指が鹿のように二つに裂けているので履かせたのが、足袋の濫膈と云われる。

天竜川を北上して、赤石山脈の南端にある静岡県水窪町^{みくぼ}に行った。水窪ダムが沈めた民俗を集める資料館で鹿笛を見せてもらった。昭和30年代から高度経済成長、列島改造に日本中が踊った。電源開発は日本を夢の国にする切り札であった。アメリカ式の文化住宅に住み、車と電化製品を持つことが幸せの全てであると国民は信じた。山を削り道路が整備され、谷を埋めてダムが作られた。

ダムに沈んで廃村になったり、移住を余儀なくされたり、町村合併によって山から人々は弾かれ伝統文化が消えた。しかし、水窪には森羅万象を神と崇め、神とともに生きた山の民の証しが辛うじて西浦地区^{にしうら}に残る。西浦田楽は、1,300年の歴史を持つ誇り高さ伝統音楽である。水没の犠牲の上に成り立つ、マスコミに煽られた電気仕掛けの騒音音楽が華やかだが、そこに真の癒しがあるのか。

一泊した四ツ菱屋旅館の向いの斉藤肉店には、水窪の猟師が獲った猪・鹿・兎肉が並ぶ。夕食はその鹿刺しを頂く。旅館の傍ら林業を営む村木さんは、経済性のみを優先して杉・檜ばかり植えた営林行政を批判する。山は保水力を失って崩れ、川が枯れ、海が栄養不足になった。昆虫、獣が減り、魚が死んだ。国民病となった花粉症もしっかりと根付

かせた。水を失った山に村木さんが植えさせられた15万本の木は、全て枯れた。水窪の次に行った平家落人の里・栃木県栗山村でも、杓子を作る職人さんが全く同じ話をしていた。商品価値のない雑木こそが、山を豊かにする。

村木家の先代、先々代は猪や鹿笛で鹿を射つマタキであった。「マタキ」は三代続けてはならぬは、村木家の家訓である。マタキには「干匹で鉄砲を返す」(マタキを廃業する)など、資源を絶やさない掟が多くある。豚は人間の食料のために神が与えたなどという教義の宗教が、世界を席捲している。山はありとあらゆる恵みを我々に与えてくれるが、それは輪廻によって成立している。採りっ放し、作りっ放しで、捨てっ放しに明日はない。

東海地方の山村の玄関には、縄が張られ、魔除けの^{ひいらぎ}柵や鯛の頭が掛けられている。自然への畏敬が人々の生活を豊かにしている。山は単なるレジャーの対象ではなく、自然との交渉の中で人間が「物」とともに「心」も頂く、癒しの音を聴く神聖な場所である。

旅の締めくくりは、マタキの里岩手県沢内村の銀河高原ホテル。レストラン内で醸造された地ビールを傾け、山菜料理を頂きながら牧場のトナカイ姿を見ていると、HAT-Jの花鳥事務局長から講演依頼の電話が入った。

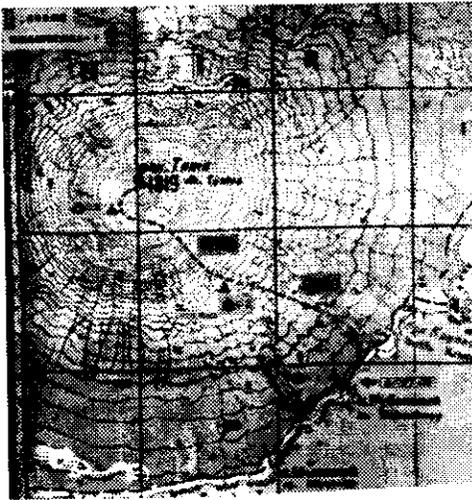


鹿・猪肉の斉藤肉店(静岡県磐田郡水窪町)

北方4島・国後島・爺爺岳調査隊に参加して

杉林仁止

1999年7月29日～8月5日、山中にて4泊5日の国後島・爺爺岳火山及び植物調査等のサポート隊として野営用品一式、食料、飲料水やその他ルートワーク等の任務による参加報告である。



1998年5月より、札幌山岳連盟の一委員としての勉強会及び爺爺岳の資料集めがはじまる。最初はただ爺爺岳に登れば良いと思いつながらの参加であった。この頃より、朝日新聞創刊120周年及び北海道支社40周年記念事業としての打ち合わせが始まる。そして朝日新聞北海道支社に日ロ共同学術調査隊・北方4島・国後島「爺爺岳」専門家交流訪問団事務局が置かれる。

99年4月ロシア側代表と研究者、日本側の研究者とサポート隊代表による協議が持たれた。共同調査隊の合計人数は59人(日本側40人、ロシア側19人)になった。グリゴエフ自然保護区長の南クリル地区には、国家自然保護区が存在し特に爺爺岳周辺は連邦

政府の所管する地区であり、食べ残し、ゴミ、排泄、たき火等、すべて禁止であることが伝えられる。

99年6月1日、朝日新聞北海道支社創立40周年記念特設紙面に掲載される。この頃よりサポート隊8名と医者1名による実施へ向けての会議が毎週火曜日に持たれる。ティクイン・テイクアウトを実践するにあたって食料の軽量化と生鮮食品は使用しないこととする。ゴミはすべて持ち帰る。排泄は各自にトイレ・ペーパーと袋を渡し持ち帰ることとする。ベースキャンプやその他のキャンプ地区は、必ずグリゴエフ自然保護区長に検査していただく事とする。

99年7月29日、根室よりチャーター旅客船「ロサルゴサ」にて出発する。日本の調査団には好意的にして戴けた。ロシアの調査団には、食事の量が足りなかったことが、後で不満となったようだ。ゴミその他の問題は、そのつどグリゴエフ氏に聞いて解決できた。ゴミや非常食の残りは、海岸のベース・キャンプに持ち帰り自然保護管理官に渡した。こうして爺爺岳サポートは終了する。



爺爺岳

開聞岳と韓国岳

伊藤ナカ子

1999年2月6日、宮崎さんに誘って頂いた、開聞岳はどっしりと構えた美しい山だった。昔から航路の目印として、又土地の人々には薩摩富士と親しまれているそうだ。



松林の中を歩くと、樹木の香りがしてとっても気持ちがいい。ただ、そんな木々の道をもくもくと歩いていくと、小鳥の音が聞こえてくる。ふと札幌では今頃山スキーの真っ最中なのに、この景色は、今時期考えても見なかった。一度はどうしても登って見たい山だった。

平成4年に旅行で来たとき、ガイドさんの説明で聞いた知寛特攻隊の話しを思い出した。昭和20年特攻隊は開聞岳の上を一回りして飛び立って行った話を思いながら、ゴロゴロとした岩だらけの螺旋になった登山道をゆっくり登る。北斜面に作られた登山道は、昨日の夜に降った雪が踏み固まりアイスバーンになっているので気をつけて歩く。灌木の茂みの間から岩峰が見え、左側に少し入った所に祠があり参拝をして頂上に立つ。真っ青な空、真っ青な海、天気が良いので大勢の人が山頂にいた。

昼食をとって記念写真、ゴミを拾ってゆっくりと下山する。麓の自然公園には、桜の花が咲いていて感激。



2月7日えびの高原に午前中に着く。

からくに韓国岳に登る。標高1200メートルの高原は雪が20センチくらい積もっていた。遊歩道ができていて公園のようになっている。登山道は、灌木帯の急坂をしばらく歩く。振り返って見るとえびの高原が目の前に広がる。ちょうど大雪山連峰を歩いているような気がする。火口湖の水は凍っている。露岩の間を登るが山頂がよくわからない。

やっと見つけ遅い昼食にする。頂上の先は、深い火口になっていて、羊蹄山のお釜より大きく見え、斜面の低い灌木はミヤマキリシマのようである。5月の下旬には淡い紅色に彩られるのだろう。すぐ横に高千穂峰がすっきりと眺められる。古くから天孫降臨の地として神聖な場所だったそうだ。時を忘れ展望すると、ふとまた来れるだろうかと思いをはせる。この山行は、両山共に天候に恵まれ大変満足だった。

2000年北海道支部山行計画

山行委員 杉林仁止

- 《1》神威岳 6月4日(日)テント泊まり可。日帰りも可。
札幌地区会員の協力による。
- 《2》空沼岳 9月2、3日(土、日)万計小屋泊。日帰りも可。
札幌地区会員の協力による。
- 《3》第5回 交流登山 北海道支部五周年事業
十勝幌尻岳清掃登山
帯広地区会員の協力による。詳細は本頁下記に掲載参照のこと。
- ※ 神威岳、空沼岳については、再度詳細をお知らせします。

2000年HAT-J『十勝幌尻岳清掃登山』のご案内

HAT-J『日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト』北海道支部ができて今年5年目になります。

この度、日高山脈の中部に位置する十勝幌尻岳で清掃登山をする事になりました。この山は頂上からの眺望が素晴らしく、眼前にカムイエクチカウシ山の北東カルを始め日高の山々の展望は最高です。是非、山を愛する方々の参加をお待ちしています。

記

- ☆主催 日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト 代表 田部井淳子
- ☆主管 日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト 北海道支部
- ☆後援 北海道
- ☆協賛 帯広市、植村直巳野外学校
- ☆協力 日本山岳会、日本勤労者山岳連盟、日本ヒマラヤ協会、北海道山岳連盟、北海道勤労者山岳連盟、帯広市役所山の会
- ☆場所 十勝幌尻岳(日高山脈中部)1846.0m
- ☆期日 平成12年9月23日(土)～24日(日)
- ☆宿泊先 植村直巳野外学校
- ☆日程 23日(土)(16:00)植村直巳野外学校集合
(17:00)渡邊 玉枝さん 講演会

標高差：1250m

参考タイム：登り4時間20分

り3時間30分

(18:00)交流会

24日《日》(5:00)起床

(6:30)植村直巳野外学校登山口からマイクロバスにて移動

(7:00)オピリネップ沢登山口出発

(11:40)尾根取り付き～ジグザグ登山道～頂上

(12:00)下山開始

(15:30)登山口からマイクロバスにて植村直巳野外学校へ

(16:00)植村直巳野外学校にて解散

☆宿泊と交通 植村直巳野外学校一泊二食付き(交流会費含3,000円)参加数
約50人程度

※ 植村直巳野外学校までの車の手配等については問い合わせ下さい。

※ 植村直巳野外学校に直接入られる方で道順が分からない方には、詳しい地図をお送りします。

☆装 備 植村直巳野外学校には寝具の用意がありませんので寝袋を用意して下さい。行動食(1食分)、食器、雨具上下、手袋、帽子、登山靴、スパッツ、着替え一式等、北海道の山は9月になると冷え込みますので、防寒対策を忘れずして下さい。

☆申し込み方法 ハガキ、又はFAXにて、住所、氏名、年齢、性別、電話番号、宿泊希望の有無(日帰り参加可)

☆申し込み 〒890-3152北海道中川郡池田町高島61 坪原 美治子
・問い合わせ先 【FAX】01557-3-2415

【コース概要】

登山口から余り足場の良くない沢治いを1時間位歩き〔登山靴で大丈夫〕尾根に取り付きます。ここから笹藪のややきついジグを切ってしぶとく登り高度をかせぎます。いかにも日高の懐へと入って行く感じで視界が利きませんが、ややもして振り返えると十勝平野が目に入ってくる。

後一息、最後の登りで頂上にでると一気に視界が開き、目の前にカムエクウチカウシ山を始め日高の山々が連なって見える素晴らしい展望が期待できます。

《中級以上》

※あらかじめお断りしておきますが、後援、協賛、協力等で現在申請中も含まれていません。随時、了承の上進行させていただきまのでご了解下さい。

編集後記

- ◆ 『しれとこすみれ』第4号をお届けします。毎年、発行が遅れお詫びいたします。今回より作成方法を一新させました。最先端のパソコンとソフト、周辺機器を揃え作成しました。真嶋さんからは原稿と写真がe-MAILで送られてきました。メールを開け、編集画面に取り入れ、写真(グレイに変えて)を貼り付け表題を整えて終了。佐藤英樹さんからは、ワプロ専用機でフロッピーの規格(2DDで、今一般のパソコンでは2HDを使用)がすでに違い、読み込めずOCR-スキャナで取り入れる。一部文字化けするが、おおかた成功。池永さんの原稿はココヨの原稿用紙のコピーでしたので、スキャナでは読み込めませんでした。線がなくなれば読み込めます。どうしても画像を取り入れるので、メモリをくい重くなりついには凍って動かなくなり、メモリの増設に走らせられました。ちなみに、ハードはIBM-Aptiva20j2190、プリンターNEC-PC-1000EWとEPCON-PM-750C、メモリ128MB、スキャナMustek1200CU、デジカメFUJI-FinePix600z。ソフトは、Windows98、マイクロソフトOffice2000Professional+FrontPage2000、編集作業はほとんどWord2000で行いました。おかげでパソコンについて少しばかり知識を得ましたので、何かありましたら気楽に声掛けてください。
- ◆ 昨年総会の折り、記念講演として道立襟路高校の枡谷先生に《鹿と山》との関わりについて話をしてほしいとお願いしたところ快く引き受けて頂きました。当日参加されたかたからも、好評でしたので又無理を言って原稿にして頂きました。参加できなかった会員のかたにも、是非読んでいただければと掲載しました。
- ◆ 支部五周年事業、《十勝幌尻》皆さんの力で成功させましょう。
- ◆ 山とイレの話が最近新聞でもよく取り上げられています。朝日新聞1月23日。

HAT-J 北海道支部だより 第4号

発行日 2000年1月30日

発行所 札幌市北区北37条西5丁目1-32

〒001-0037 花島書店内

HAT-J北海道支部

TEL&FAX 011-737-9558

e-MAIL hanasima@m08.alpha-net.ne.jp

発行責任者 宮崎 初恵

編集責任者 花島 徳夫

大雪山を世界遺産に

旭岳ビジターセンター 池永甦次

道新紙上で既にご承知の方も多いと思うが昨秋上川町で「大雪山の自然と世界遺産を考える」というフォーラムが行われた。吹雪の夜この田舎の町にしては、500 人の人々が集まりフォーラムは成功であった。知床でもこの動きがあり、自然保護の立場から、次の世代に残すには、世界遺産登録が一つの選択肢であることは、多くの人が認める所となった。

今回この様なフォーラムが催されたのは、一般の人々の盛り上りを企む一つの手段でもあった。

平成 5 年に屋久島が世界遺産に登録されたが、その後どうなったであろうか。聞く所によると、事前に懸念されていたことはやはり起った。屋久島の唯一のシンボルである縄文杉が、多くの人に踏みつけられ、雨水の影響もあって根が相当傷んだということである。百名山ブームや交通の利便化が多くの人を屋久島に引きつけた。島は経済的には潤ったが、大切な自然を傷めたことは残念だ。

「大雪山に登って山の広さを語れ」と言ったのは大町桂月であるが、訪れた人が同じ印象を感じるのには、日本人のみならず、秀でた山岳を持つヨーロッパやカナダの外国人とて同様である。山の広さ、そこに生息する動物、

植物、森林の美しさに一様に目を見張るのである。登録に足る自然条件は充分である。

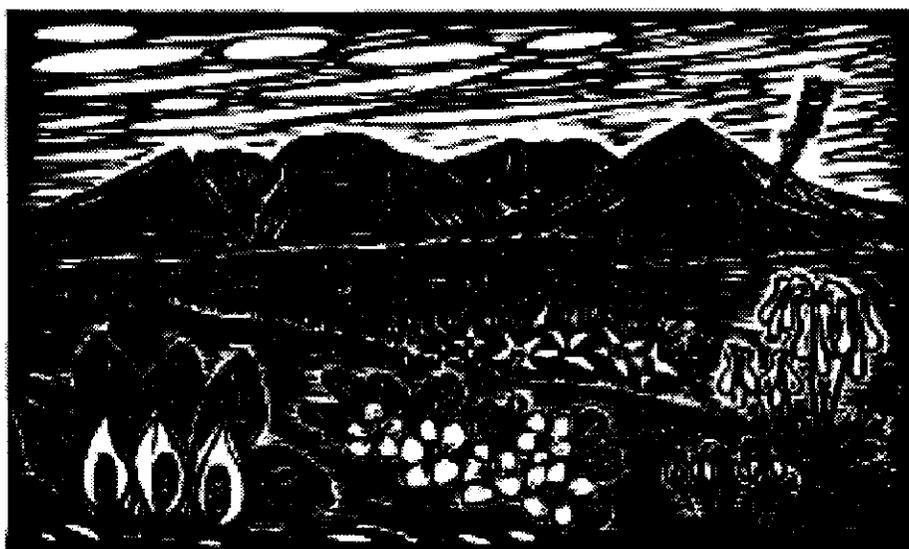
もし登録に漕ぎ着けたならば、国内外の注目を浴びる様になり、現在より更に多くの人々が訪れるだろう。これらの人々に適切な自然ガイドがなされれば、大雪山の自然を理解し、愛し、しいては自然保護問題にも深い関心を寄せてくれることになるであろう。またこの中から地球環境問題を真剣に考え行動してくれる人が多く生ずれば登録のねらいが達成されたことになる。

しかしながら、登録までのアプローチはなかなか厳しいものがある。大雪山を歩いた方は気付いておられると思うが、明らかなオーバーユースの傷跡が諸所に見られることである。登山者の踏み付けにより高山植物は傷み裸地が広がっている。トイレの無い指定キャンプ地は、放射状に踏跡がつき、先端はたれ流しのし尿と紙が目をおおっばかりに散乱しているのである。団体ツアー登山客が毎日数隊通過する旭岳・黒岳の銀座コースは特にひどい。荒れた登山道には今年も数億かけて木道が延々とつけられたが未だ未整備の箇所も多い。トイレについては景観の問題やし尿処理・施設の管

理等相当な経費がかかるということ
で未だ手がつけられていない。

登山道の整備やトイレ問題の二つを
例にあげたが、大雪山には入山口が
幾つもあり、ロープウェイも100人乗りが
二ヶ所もあるので、美しい高山植物
のある高山帯まで容易に達すること
が出来る。当然オーバ-ユ-スの問題が
起ることは目に見えているからである。
さらに重要なことがらば、地元住民や
道民が大雪山やこれを取り巻く自然
から、日々恵みを受けている事に感
謝の念を持ち、この自然を守って後
世に遺産として残したいという意識の
盛り上りと行動力である。2000年の

人間の文化の蓄積はすばらしいもの
があり、利便で快適な生活を楽しむ
ことが可能になっている。しかしその
裏には大切な自然を取りくずし失っ
たものも多く、将来にわたって憂慮さ
れる温暖化問題も出てきた。又人々
の心の荒廃ももたらしてしまった。大
雪山が23万haと言っても地球上で
は点に過ぎない。今やこの点を人々
の心の故郷となるよう守り育て残して
いくことが、如何なる困難性あろうとも
私共の急務ではあるまいか。



渋谷正己『大雪山と花たち』

【渋谷正己】旭川在住。版画家、山(ネパールから大雪まで)、自然動植物。
日本山岳会会員(番号 4795)。 《花島書店多種斡旋取り扱い中。》